

『鏡の国のアリス』に見られる談話標識

-- 英々辞典：POD, LDOCE で読み解く --

下笠 徳次

Discourse Markers Seen in *Through the Looking-Glass* --- A Close Reading Consulting POD and LDOCE ---

Tokuji SHIMOGASA

0. この論考は「山口学芸研究」(第8号, 2017年)の続編となるもので、取り扱う作品が異なるのみとなる。従って論の進め方は同じとなる。しかしながらルイス・キャロルの2つの『アリス』物語のなかにあって、その内容の質は少なからず異なることになる。前作は言うなれば、キャロルの偶然の産物と言っても過言ではないくらいの作品であるのに対してこの後作の『鏡の国のアリス』は最初から意図的に十分に構想が練られたものとなっている。西洋将棋チェスの進行に合わせて話が展開されることになる。

従って、チェスへの理解が完全なる理解の条件となる。論考の対象とする談話標識に関しては前作に見られる言語現象とさほどの相違はないが、それでもやはり、前作に見られる場合と比べると一味異なる使い方がなされている個所もある。前作は1865年の、この後作は1871年の作で、このわずか6年の時の経過が言葉の使い方にもどのように影響を及ぼしているかを観察することも興味深いので、逐次検討することにする。

「山口学芸研究」第8号を見ていない学外の読者を前提としなければならないので、この序論で談話分析あるいは談話標識について若干遡及することにする。「談話分析」は文より大きな言語単位の構造パタンの研究を言い、「談話標識」の方は会話の中で同意や反論、話題の転換等のために使用される語(句)のことを言う。英語では discourse marker¹⁾と言い、最新の研究によると60以上もの例を挙げて詳述している²⁾。副詞的表現 --- actually, anyway, besides, first(ly) last(ly), however, nevertheless, nonetheless, still, kind [sort] of, like, now, please, then, though, whatever; 前置詞句表現 --- according to, after all, at last, at least, by the way, in fact, in other words, of course, on the other hand, on [to] the contrary; 接続詞的表現 --- and, but, yet, plus, so; 間投詞的表現 --- ah, huh, look, oh, okay, say, uh, well, why, yes / no; レキシカルフレーズ(辞書的句) --- I mean, if anything, if you don't mind, if you like, mind (you), you know, you know what?, you see ...

しかしながら以上の語(句)がすべてというわけではない。dear me, indeed, there, come, so, eh³⁾等も加えることができる。事実、さらに幅を広げて、談話「表現」として約650頁に及ぶ解説を施した辞典も登場している⁴⁾。英語学習者にはぜひとも習熟して欲しい英語表現である。

尚、‘yes’ と ‘no’、‘of course’、‘however’ などそれほど説明の要がないように思われるものは便宜的に考慮の対象から外すことにする。

談話標識は文脈を離れて観察すると中学生でも分かる易しい語（句）ばかりである。しかしながらこれらの語（句）がひとたび文脈の中に紛れ込んでくると、ことはそう簡単ではない。このことは話し言葉のレベルにおいてだけでなく、書き言葉のレベルにおいても当てはまる。英語の非母語話者の立場からすると、私たち日本人が外国語である英語を理解する際に文や発話の文字通りの意味を理解するとともに、表面上には現れていない、話し手の発話意図を正しく理解することが肝要となってくる。しかしながらそれには非英語話者には少なからぬ困難・難儀が伴うことになる。これから代表的な例を絞って取り上げ、印象に残るであろう文脈の中で言及していくことにするが、それらは話し手が自分の発話意図を意識的にあるいは無意識的に聞き手に伝える言語的意図として機能し、実践的な意思の疎通の場において非常に重要な位置を占めるものとなる。書き言葉においてもいわゆる「行間を読み取る」(‘read between the lines’) 際に非常に大きな手掛かりを提供してくれることになる。このような、話し手と聞き手（書き手）の発話意図を担うことになる種々様々な言語（英語）表現を学問的に「談話標識」と呼ぶ。近年、この方面の研究が活況を呈してきている。

1. 長い英語の歴史において古典の時代から当然のことながら、これらの談話標識は継続的に使用されてきていて、特に会話体の中で頻用されている。これらは別の言葉で言うと「埋め草」(‘filler(s)’) で、「つなぎ」の機能を果たしている。言うなれば緩衝材の役割を担っていることになる。このような語（句）を適所に配置することによって長くなる文章も一息つくことになり、息切れしなくなる。決して過小評価されてはならない表現の技巧と言える。上述のすべての語（句）に言及する余地はないので限られた数の談話標識に絞って、代表的な例と思われるものを取り上げ、簡略にその果たしている機能を説明していくことにする。原文に相当する邦訳は最小限度に留めることにする。

2. 叩き台として取り上げるのは児童文学の頂点の1つと評価が定まっている、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』である。原タイトルは *Through the Looking-Glass and What Alice Found There* で前作の『不思議の国のアリスの冒険』より6年後に書かれている（1871年）。世間一般的には原タイトルの後半部分は省略されることが多い。最初の章が‘Looking-Glass House’となっているように、アリスはいきなり（と言っても子猫の Kitty としばらく戯れてからであるが）、鏡の部屋に投げ込まれることになる。ここからは何もかも「逆転」の世界である。鏡を境にしているので左右対称となる。アリスは多くの「きょうだい」(英語では男女を問わずまとめて言うときは‘siblings’と言う)の中の4番目。さらに5人目、6人目が生まれることになる。母親がお産を控えると、オックスフォードからかなり離れたところにある身内の家に滞在することになる。あまりにも寂しくなってドドソン先生（キャロルのこと）を呼び寄せて、一緒に徒然を慰めた記録も遺っている。その滞在先の居間に大きな鏡があったのを忘れずにいたドド

ソン先生がこの鏡のモチーフを考えついたと言われている。キャロルは現実の生活面で経験（体験）する出来事を作品の中で形を変えて具現化してくれているのである。

前作と同じ全12章から成り立っている。イギリスは（少なくとも1970年代までは）12進法の国で、今でも12を基準にした、ものの数え方が活かされている。文学作品でも『月と6ペンス』という、W.S. Maughamの大作が存在する。スーパーに見られる食料品でも6個売り、12個売が多い。twopennce, threepence という小銭の単位は安売りの場面ではなくてはならない単位となっている。そしてキャロルは42という数字に非常な拘りをもっているが、これは謎のままである。

談話標識は細切れの、断片的な言語現象ではあるが、しかしながら、思いもよらぬ、とても大切な機能を果たしていることが少なくない。たかが談話標識、されど談話標識である。印象的なものがあたかも万華鏡のように随所に散りばめられている。これらの言語現象が生起する個所は当然ながら主人公アリスとこの不思議な世界の不思議なキャラクター達との間に交わされる場面となる。その丁々発止のやり取りが主たる分析の対象となるが、アリスの独り言の中にも随所に現れることになる。アリスの発する談話標識がいかにも文脈にピタリと合致しているかも知るのであろう。それというのもアリスはとても理知的な女の子で（実人生においてもそうであった）、言葉遣いでは天下一品の頭の良さを示してくれている。この聡明な女の子は英語で言うところの‘curious’な娘であった。これはものを「積極的に知りたがる」(‘eager to learn’ (POD) というプラスの意味であって、「(私生活などを) のぞく、詮索する」の意の‘prying’ (POD) ではない。

3. それでは第1章：‘Looking-Glass House’に見られる談話標識を見ていくことにする。最も多く現れるのは予想されるように‘oh’で9回、以下‘Now’6回、‘Why’3回、‘Well’と‘you know’がそれぞれ2回、そして‘Well then’, ‘in fact’, ‘there’, ‘at least’などがそれぞれ1回生起する。‘Mind’も直後に‘you’を伴って談話標識と見なされるが、これの延長線上にあるものと思われるものもある。‘Now’は文脈によっては「いま」という「時」の意味合いが含まれる場合もあり、必ずしも談話標識とは断定できない場合もある。言葉は、特に会話は生きていて、必ずしも教科書通りには分析できないことが少なくない。‘really’にしても‘here’にしても広い意味での談話標識の役割の一端を担っていると見做してもいい個所がある。

最初に生起するのは‘Oh’で、検討してみる価値が大いにありそうである：

‘Oh, you wicked wicked little thing!’ cried Alice, catching up the kitten, and giving it a little kiss to make it understand that it was in disgrace.

悪戯盛りの黒の子猫 Kitty を抱き抱えながら言葉のお仕置きをしている可愛い場面で、「んもー、あらあら、あなたったら」などいろいろな邦訳が可能で、多くの訳書でも訳者の個性が出ている。PODでは「種々様々な感情を表す」とある。ここではアリスの小さな驚きが含まれ

ている。

もう1か所、‘Oh’が現れる文脈を見てみることにする：

‘Oh, Kitty, how nice it would be if we could only get through into Looking-Glass House! I’m sure it’s got, oh! such beautiful things in it!’

「**ねえ**、キティや、鏡の国のおうちへ入れたらどんなにか素敵でしょうね！**ええ**、きっとそこには大変綺麗なものがたくさんあるに決まっているわよ！」。ここでも両方の‘oh’にアリスの驚きが含意されている。他の文脈に見られる‘oh’も類似の機能を果たしているのが分かる。アリスの独り言の中で主として生起する。

次に‘Now’が含まれる文脈を見てみることにする：

‘Now you can’t deny it, Kitty: I heard you! What’s that you say? (pretending that the kitten was speaking).’

「**さあさ**、このことは否定できないわね、キティや。ちゃんとあなたの鳴き声を聞いたんだからね！今、何て言った？（子猫が喋っているという前提で）。ここでは会話の切り出しで、相手の注意を喚起し、「**さあ、ところで**」の意で、関連した話題に戻りつつ新たに談話を再開するのに用いられていることが分かる。発話の途中で話題を転換する場合や、一連の談話で新たな段階へ移行する合図として用いられている。時間の流れを維持しながら話題の転換を円滑に行う機能を果たしている。

次の文脈に見られる‘Now’も全く同じ機能を果たしていると見ていい：

‘Kitty, can you play chess? **Now**, don’t smile, my dear, I’m asking it seriously.’

「キティや、あんたチェスができる？**おっと**、笑わないでよ、私の可愛い子ちゃん。真面目に尋ねているんだから」。ここでは相手の注意を喚起していることが分かる。PODでは「（時間を示すのではなく）文脈に様々な音調を与えて‘pray, surely, I warn you, you must know’の意であると語釈している。ここではキティに軽い警告をしていることになるので、まさしく‘I warn you’がピッタリと当てはまる。

次の文脈も検討に値しよう：

‘**Now**, if you’ll only attend, Kitty, and not talk so much, I’ll tell you all my ideas about Looking-Glass House...’

「**さて**、キティや、もしあんたがじっとしていて、そんなに多くをしゃべらなければ、わたし、あんたに鏡の国の家について私が考えているすべてを教えてあげるわ」。ここでも愛猫キティの注意を喚起している談話標識になっている。このような、キティへの話しかけの中で‘Now’がしばしば生起して面白い。

話題転換の場面で‘Now’とほぼ同程度の頻度で生起するのが‘Well’である。否、キャロル全

体の作品を見渡すと ‘Well’ の方が多いかも知れない：

‘Well, that’s *your* fault, for keeping your eyes open -- if you’d shut them tight up, it wouldn’t have happened. **Now** don’t make any more excuses, but listen!’

‘Well, I shouldn’t mind *that* much! I’d far rather go without them than eat them!’

‘Well, it was a nice check, Kitty, and really I might have won, if it hadn’t been for that nasty Knight, that came wriggling down among my pieces.

and Alice had been reduced at last to say ‘Well, *you* can be one of them, then, and *I’ll* be all the rest.’

上に見られる4つの ‘Well’ はそれぞれ「いいこと、そう」、「あっ、そう、いいわよ」、「ほら」、「それならば」と邦訳可能である。最初の例は愛猫キティの同意を期待する談話標識となっている。2番目の例は悪戯をした罰として1年間分で50回の食事抜きを課せられたとしたらどうなるか、という文脈である。従って「あっ、そう」でも私、そんなことちっとも構わないわ!となるので、一種の開き直りを示す談話標識とも言える。3番目の例はキティに軽い同意を求めていることになる。4番目の例はアリスが「王様と女王様になったつもり」(‘Let’s pretend we’re kings and queens’) ごっこしよう、とお姉さんに言う下りである。つまり、最低人数は4人となる。しかし自分とお姉さんの2人しかいないので、自分が残り3人の役を果たさねばならなくなる。従って、「それならば、私が残り全部を引き受けるわ」となる。ここでは話題を整理する談話標識と言えよう。次に言及することになる ‘Well then’ と同義となる。

この ‘Well’ と ‘then’ が共起する例が1例見られる：

‘Well then, the books are something like our books, only the words go the wrong way: I know *that*, because I’ve held up one of our books to the glass, and then they hold up one in the other room.’

「そう、それならば、ということは、鏡の国の家の本はこちらの世界の本みたいなものだが、ただし、文字があべこべになっているだけのことよ…」。この連続した談話標識に先行する内容を受けて、さらに念を押す形となっているので、前言を補強する機能を果たしていると言える。‘Well then’ は「それはそうとして」という具合に、通常はあまり好ましくない状況に対し、話し手がしぶしぶ納得あるいは容認したことを伝え、次の行動に進む談話標識であるが、上記のような使い方もときになされることがある。

次に ‘Why’ を含む文脈を検討することにする：

‘Let’s pretend the glass has got all soft like gauze, so that we can get through. **Why**, it’s

turning into a sort of mist now, I declare! ...’

Alice watched the White King as he slowly struggled up from bar to bar, till at last she said ‘**Why**, you’ll be hours and hours getting to the table, at that rate.’

She puzzled over this for some time, but at last a bright thought struck her. ‘**Why**, it’s a Looking-Glass book, of course! And, if I hold it up to a glass, the words will all go the right way again.’

3つの‘Why’はそれぞれ「ほら、ほらほら」、「おやおや」、「そうだわ」と邦訳可能であろう。最初のは「～ごっこ」遊びの得意なアリスの言葉で、ちょっとした驚きが含意されている。2番目のはアリスの独り言で「白の王様が炉格子の柱を少しずつ上っていく光景を見て「おやおや、この調子ではテーブルに辿り着くまでにはかなりの時間がかかるわ」という場面なので、自分を納得させていることになる。3番目のは例の逆さ文字で現れることになる‘Jabberwocky’の歌を鏡にかざすと元の文字が再現される文脈である。従って、「そうだわ」とアリスがほっと安堵の胸をなでおろす場面である。行き着くところは大小に拘わらず「驚き」を表す談話標識である。PODは談話標識としての‘why’には‘discovery’, ‘impatience’, ‘reflection’, ‘objection’, そして‘conclusion’の意があるとしている。ここではいずれも「発見」ないしは「結論」と見なすことが可能である。LDOCEは「驚き」の意しか挙げていない。確かに上記3例は「驚き」に通じることは否めない。なお、上記3つの例文の中に目立たないが‘at last’と‘of course’という談話標識が生起している。‘at last’は「ついに、やっと、とうとう」の意で、常に話し手の気持ちを表すので談話標識の機能を果たす。特に第3例においては成立しそうでなかなか成立しなかった行為や状態が一定の時間的範囲内で成立したことを叙述するだけでなく、話し手の待ち望む気持ち、あることが何とかして実現して欲しいと切望する気持ちをも示す表現である。従って「やれやれ、やっとのことで、ようやく」という邦訳がより好ましいかも知れない。

‘you know’を含む文脈を見てみることにする：

And then it covers them up snug, **you know**, with a white quilt; and perhaps it says “Go to sleep, darlings, till the summer comes again.”!

‘I want so much to know whether they’ve a fire in the winter: you never *can* tell, **you know**, unless our fire smokes, and then smoke comes up in that room too ---’

最初の文脈における‘it’は雪で、「冬が来ると木々や野原を、ほらね、白い毛布で温かく包むのよ…」。作者ルイス・キャロルが読者を巻き込んでいる談話標識である。日本古典文学に見られる「草子地」と同じ働きをしている。あとの文脈に見られる‘you know’はアリスの独り言でやはり、「ほら」という軽い同意を読者に求めていると言えよう。

前置詞句 ‘in fact’ が現れる文脈を検討すると：

‘So I shall be as warm here as I was in the old room,’ thought Alice: ‘warmer, **in fact**, because there’ll be no one here to scold me away from the fire. Oh, what fun it’ll be, when they see me through the glass in here, and can’t get at me!’

「すると私は元の部屋にいるときと同じくらい温かい思いをすることになるのね。いや、**実際には**、もっと温かいかも。だって火から離れなさいと私を叱る人は誰もいないのだから。この鏡の国の部屋のガラス越しに私を見ながら、それでいて私を捕まえることができなくなると、ああ、どんなにか面白いことでしょうね！」。‘in fact’ には「実際に、実際のところ」という順接と「**実際には**」という逆接の、2つの意があることに留意しなければならない。あくまでもそれは文脈が決定することになる。POD では「特に訂正を導入するために用いられる」とある。つまり、「**実際には**」という逆接のみを定義している。LDOCE は ‘as a matter of fact’, ‘in (actual) fact’, ‘in point of fact’ をまとめて ‘really, actually’ の意、として逆接と順接の用例を呈示している。

気になる ‘there’ の含まれる文脈を検討することにする：

‘And don’t keep your mouth so wide open! All the ashes will get into it --- **there** now, I think you’re tidy enough!’ she added, as she smoothed his hair, and set him upon the table near the Queen.

「それに、そんなにお口を大きく開けないで！灰が全部お口に入ってしまうではありませんか --- **さあ、ほら**、今やすっかり小ざれいになったと思いますわ！」。暖炉の中で灰まみれになっていた王様の髪の毛の埃を払いのけて、テーブルの上の女王の傍にアリスは置いてやる親切心を見せている個所である。ここに見られる ‘there’ は自分のやった行為の結果を受けて安堵の胸をなでおろしているところである。POD では「注意を惹きつける間投詞」の機能を持つ、とある。たしかに王様の注意を惹きつけている。LDOCE は「誰かを慰めるために用いられ、勝利、満足、激励、同情、悲しみ等を表す間投詞、とある。ここでは「満足」が該当する。

‘Mind’ を含む文脈を検討することにする：

‘Blew --- me --- up,’ panted the Queen, who was still a little out of breath. ‘**Mind** you come up --- the regular way --- don’t get blown up!’

「私、ふっ飛ばされ --- たのよ。**いいこと**、あなたは普通のやり方で昇っていらして。私のように吹っ飛ばされないようにしてね！」。談話標識としての ‘mind’ は通常、このように直後に ‘you’ を伴う。この表現は元々、「これから言うことを心に留めておきなさい、注意しなさい」という命令的な意味を表したが、今日ではこうした意味合いは希薄となり、専ら聞き手の注意を喚起する談話標識としての機能を果たしている。聞き手との心理的な距離を詰めようとする話し手の親しみの情や自己防衛の気持ちをも表す。POD は ‘mind you!’ の項目を設け、parenthesis with

concession or proviso という語釈をしている。「譲歩・条件を伴った挿入語句」となる。LDOCE は ‘mind you’ あるいは ‘mind’ は ‘take this fact into account’ の意、としている。‘this fact’ とは次に述べる事実、つまり、この文脈では「通常の方法で炉格子を昇っていくこと」を言う。

最小音素から成る一語談話標識 ‘so’ を最後に取り上げることにする：

And Alice got the Red Queen off the table, and set it up before the kitten as a model for it to imitate: however, the thing didn't succeed, principally, Alice said, because the kitten wouldn't fold its arms properly. So, to punish it, she held it up to the Looking-Glass, that it might see how sulky it was, ‘and if ...’

「ということで / だから / それで、この子猫を罰するために、アリスは、あんたがどんなにふてくされた顔をしているかを見せるためにアリスは鏡に向かって掴みあげることになる」。

副詞 ‘so’ の多機能ぶりがつとに有名であるが、ここではその機能化がさらに深化し、現在では前述の内容を受けて論理的な結論を導く接続詞として「その結果、それで、だから」の意で幅広く用いられるようになってきている。談話標識としての ‘so’ は文頭で先行文脈から導かれる論理的結論を合図し、「だから、それで、従って」の意を表す。POD では「承認・是認を表す間投詞」としての機能を持つ、とある。LDOCE では ‘with the result that’, ‘therefore’ の意につながる、とある。‘so’ については以降は取り扱わないことにする。

4. 第2章：‘The Garden of Live Flowers’ はアリスと花壇の花々との、またそこを通りかかった赤の女王様との会話が主となる。ここに生起する談話標識は ‘you know’ 5回、‘Well’ 4回、‘Why’ と ‘Oh’ がそれぞれ2回、‘at least’, ‘you see’, ‘Well then’, ‘at last’ がそれぞれ1回で、‘Now! Now!’ と連発されるのも見られる。さらに1ヶ所だけ ‘now’ が談話標識なのか、時を表す単なる副詞なのか微妙な個所がある。

以上の談話標識はすべてすでに第1章で生起していて、その機能に触れてきているので改めてすべてをさらに検討することはしないが、文脈的に見て興味をそそりそうな個所は言及することにする。

最初の所に現れる ‘at least’ に注目したい：

‘I should see the garden far better,’ said Alice to herself, ‘if I could get to the top of that hill: and here’s a path that leads to it -- **at least**, no, it doesn’t do *that* --’

「あの丘の天辺に行けばお庭がもっとよく見えるはずだわ。そこに通ずる小道がここに一本あるわ -- いいえ、**少なくとも**、そうはなっていないわ --」。邦訳は「少なくとも」であるが、ここでは否定的な見解で、言語表現そのものについて言及し、「もっと正確に言えば、つまり」の意で前言を訂正したり、言い換える機能を果たしている。

次に ‘Well’ と ‘Well then’ が相次いで生起する場面を見てみることにする：

‘Well, *this* turn goes to the hill, I suppose -- no, it doesn’t! This goes straight back to the house! Well then, I’ll try it the other way.’

「ええと / そうねえ、この小道を行けば、丘に辿り着けると思うわ -- やっぱり、だめ！元の家に戻りということになるわ！（それ）ならば、別の小道を行ってみようかしら」。

上述の引用文にすぐ続く個所である。目指す丘へ通ずる小道が見出せないアリスの焦りが見られる文脈となっているので、ここに見られる ‘Well’ は話し手アリスが話の途中で詰まり、どのような言葉で伝えようか迷っていることを示している。あるいは「**そう**だわ、この道ならあの丘に通ずるはずよ」という安堵あるいは希望的観測を表しているともとれる。そして、‘Well then’ は「それならば」という一種の開き直りを表しているともとれる。この表現はあまり好ましくない状況に対し、話し手がしぶしぶ納得・容認したことを伝え、次の行動に移るサインでもあるので、ここがピッタリ合致する文脈となっている。

もう1ヶ所、‘Well’ が生起する文脈を見てみることにする：

‘Of course it is,’ said the Queen. ‘What would you have it?’

‘Well, in *our* country,’ said Alice, still panting a little, ‘you’d generally get to somewhere else -- if you ran very fast for a long time as we’ve been doing.’

「もちろんそうだよ。あんたはどうあって欲しいと思うのかね？」「**あのう** / **そうですね**、私たちの国では、ほかのどこかの土地に大抵は辿り着くのですが -- もし私たちがこれまで長い間、そうしてきたと同じように早く走っておれば」とアリスは喘ぎながら言う。女王様に引っ張られて空中を飛ぶようにして走っているアリスなので、一息ついて発言していることになる。そこでやおら「あのう」とか「そうですね」というアリスの軽い驚きあるいは安堵、相手への意見提出の感が読み取れるようである。

もう1例、‘Well’ について見ていくことにする：

‘Is she like me?’ Alice asked eagerly, for the thought crossed her mind. ‘There’s another little girl in the garden, somewhere!’

‘Well, she has the same awkward shape as you,’ the Rose said: ‘but she’s redder -- and her petals are shorter, I think.’

花たちの言葉に翻弄されているアリスはもしかこの庭のどこかに自分と同じ女の子がいるのでは、と期待する個所である。「**そう**ねえ / **まあ**、あんたみたいに不格好な姿をしているわよ」。アリスの期待感に対する答えで、話を始めるにあたり、唐突さを排除し、滑らかに会話にいる談話標識の役目を果たしているともとれる。

つぎに2回生起する ‘Why’ について検討することにする：

‘Where does she wear them?’ Alice asked with some curiosity.

‘Why, all round her head, of course,’ the Rose replied.

‘Are we nearly there?’ Alice managed to pant out at last.

‘Nearly there!’ the Queen repeated. ‘Why, we passed it ten minutes ago’ Faster!’

前者は「そのかたはどこに果穂（王冠についている突起状のもの）を着けておられるの？」「**なあに**、頭の周囲にだよ、もちろんね！」という文脈なので、アリスの無知ぶりに驚いている発言となっている。擬人化されているバラはアリスの妹がバックにある。後者は赤の女王に引っ張られて走っているアリスが「もうそろそろ目的地に着きますの？」という質問に対し、女王様が答える場面で「もうそろそろじゃと！**なあに / とんでもない**、そこは10分前に通過したよ。もっと早く（走ろうよ）！」となる。明らかにここに見られる‘Why’は赤の女王の驚きを表している。「おやおや、なんだ」の意で話し手が驚いたり、熟慮したりしているという心的態度を持っているという文脈で後続発言を解釈するよう仕向ける機能を持つ。PODは「発見・苛立ち・反省・反論・結論」などを表す間投詞、と定義しているの、ここでは女王の苛立ち、あるいは反論を表していることになる。

‘Now! Now’ が生起する文脈を見てみることにする：

‘Now! Now! cried the Queen. ‘Faster! Faster!’

直前の引用個所に引き続き現れる文章なので文脈は分かり易い。これでもかこれでもか、と早く走ることを強いる女王の言葉なので「**さあさあ**」という、はっきりとした、聞き手に対する催促と取れる。PODでは「時の含意はなく、文章に様々な音調を与えて‘pray’, ‘surely’, ‘I warn you’, ‘you must know’ と語釈している。言うなれば「いいか、言っておきますよ」という強い口調となっている。このように‘Now’は文頭で用いられるときは談話の話題管理機能を担う。会話の切り出しや相手の発言を受けて、相手の注意を喚起し「さあ、さて、ところで」などを意味し、関連した話題に戻りつつ新たに談話を再開する際に用いられる機能を果たすことになる。

この引用より6行あとに次のような文脈が見られる：

The Queen propped her up against a tree, and said kindly, ‘You may rest a while, **now.**’

走りに走った二人はついに走りを止め、息も絶え絶えに地面に腰を下ろす場面である。従って、女王はアリスに「少しなら休んでいいよ、**いま**」なのか「少しなら休んでいいよ、**さあ**」なのか曖昧となる。どのような研究書にもこの解釈には触れていない。いずれの解釈でも可、というのが文学の奥の深さかも知れない。

‘Now’ と ‘you see’ が共起する文脈を見てみることにする：

‘A slow sort of country!’ said the Queen. ‘**Now, here, you see**, it takes all the running *you* can do, to keep in the same place....’

「あなたの国はなんと歩みののろい国だね！さてと、ここ私たちの国ではだね、**いいか**、同じ場所に留まろうと思えば精一杯走ることしかほかに方法はないね」と女王。‘Now’は直前に引用した個所に現れる‘Now’と同等の機能を果たしていると結論することができ、‘you see’は聞き手に同意を求める、代表的な談話標識となっている。

なお最多5回生起する‘you know’もまた、聞き手に同意を求める機能を果たしていることが分かるのでここでは文脈を追って検討することは避ける。

5. 第3章：‘Looking-Glass Insects’に見られる談話標識は‘you know’4回、‘Well’3回、‘Why’2回、そして‘in fact’、‘Oh’、‘Now then’、‘at any rate’、‘after all’、‘dear me’がそれぞれ1回となる。‘Oh’には言及しないことにする。‘in fact’から吟味することにする。この談話標識には2つの機能があるが：

However, this was anything but a regular bee: **in fact**, it was an elephant --- as Alice soon found out, though the idea quite took her breath away at first.

‘in fact’の前文の内容は「とても普通の大きさの昆虫どころではなかった」とあるので、ここにおけるこの談話標識は「**実際のところ / 実を言う**と」という意となり、前言を補強する順接の機能を果たしている。

‘Now then’と‘Why’が同一段落に現れる文脈を検討することにする：

‘**Now then!** Show your ticket, child!’ the Guard went on, looking angrily at Alice. And a great many voices all said together (‘like the chorus of a song,’ thought Alice) ‘Don’t keep him waiting, child! **Why**, his time is worth a thousand pounds a minute!’

アリスは気がついてみると列車の中になる。そこで車掌が「**さてさて**、切符を拝見しようかな！… **なあに**、車掌の時間は何しろ1分が1,000ポンドの値打ちがあるんだよ！」。最初の‘Now then’は明らかに新たな話題への移行を合図しており、「**さて、それでは**」と聞き手に注意の喚起を促していることが分かる。あとの‘Why’は「**さて / いいか**」といったような、相手への注意の喚起の役目を果たしている。

全く同じ文脈がすぐあとに続くことになる：

And once more the chorus of the voices went on with ‘The man that drives the engine. **Why**, the smoke alone is worth a thousand pounds a puff!’

「機関士とは機関車を運転する人のことだよ。**なあに**、煙はひと吹きだけでも1,000ポンドの値打ちがあるんだよ」。聞き手アリスを小馬鹿にした談話標識となっている。

‘Well’に関して1ヶ所だけ検討することにする：

If she couldn't remember my name, she'd call me "Miss," as the servants do.'

'Well, if she said "Miss," and didn't say anything more,' the Gnat remarked, 'of course you'd miss your lessons. That's a joke. I wish *you* had made it.'

ここは動詞 'miss' をどう解するかジョークの場面である。アリスに名前がなくなっても家庭教師 (Miss Pricket) は私を「お嬢さん」と呼ぶでしょうよ」「よし分かった、もしそう言って、それ以上何も言わなければ、もちろんあんたは勉強を「ミス」(「さぼる、の意」) できるよ」。ここに見られる 'Well' は前文を受けて、唐突さをなくし、円滑に話に入るために用いられている談話標識となっている。一息入れて「それならば」とも邦訳可能である。こうして 'Well' の働きはとても幅が広いことが分かる。

'at any rate' が含まれる文脈を検討することにする：

She was rambling on in this way when she reached the wood: it looked very cool and shady. 'Well, **at any rate** it's a great comfort,' she said as she stepped under the trees, 'after being so hot, to get into the -- into the -- into what?' she went on, ...

アリスはこうしてぶらぶら歩いていると、森に辿り着くが、そこはひんやりとしていて、木陰ができています。「これでよし、とにかく / いずれにせよ、ほっと一安心だわ」といった文脈となっている。前言の内容を補強する談話標識となっている。

上記のすぐあとに 'after all' を含む段落がある：

She stood silent for a minute, thinking: then she suddenly began again. 'Then it really *has* happened, **after all**. And now, who am I? ...

「それじゃ、**結局のところ**、そういうことになってしまったのね。ところで私は一体全体誰なの？」…

名前のない森に入っていくと、アリスも自分の名前を忘れてしまう、という文脈である。'after all' はそれまでの言を受けて、「結局のところ / やっぱり」という意になる。通例、文尾に置かれ、事の成り行きでは様々なことが起きたが、とどのつまりとして「結果的に」と収束する。POD は 'after' の項で 'in spite of what has been said or done or expected' と語釈している。POD は 'after all' を独立見出し語句として 'in spite of everything' と短く語釈している。POD の語義は原義そのものであることが分かる。

最後に 'dear me' に触れることにする：

'I'm a Fawn!' it cried out in a voice of delight. 'And, **dear me!** you're a human child!'

薄暗い森の中から明るい開けた場所に出て、小鹿が自分の身の上を明かす場面である。「とこ

ろで、**おやおや**！あんたは人間の子どもじゃないの！」と小鹿が驚いている様子が分かる。この談話標識を POD は「驚きや苦痛など」を表す間投詞と定義している。LDOCE は「驚き・悲しみ・小さな怒り・落胆」を表す間投詞と定義し、「落胆」と「悲しみ」の用例を呈示している。

6. 第4章：‘Tweedledum and Tweedledee’では‘you know’5回、‘Well’と‘Why’がそれぞれ3回、そして‘I tell you’が1回生起する。‘you know’のうち1回は‘The Walrus and the Carpenter’というのだらだと続く、面白みのない詩の中に脚韻句として現れるが、意味はいつもの「ほら」に落ち着く。

‘Why’が連続して生起する文脈を検討することにする：

Alice said ‘Nobody can guess that.’

‘**Why**, about *you*!’ Tweedledee exclaimed, clapping his hands triumphantly. ‘And if he let off dreaming about you, where do you suppose you’d be?’

‘Where I am now, of course,’ said Alice.

‘Not you!’ Tweedledee retorted contemptuously. ‘You’d be nowhere. **Why**, you’re only a sort of thing in his dream!’

アリスが実在の少女か、あるいは赤の王様が夢の中で見ると一存在なのか、をめぐる論争の個所である。「**なあに**、あんたの夢を見ているところだよ！」— だからもし王様があんたの夢を見るのを止めたら、あんたはどこにいると思う？」「もちろん、いま居る所によ」「違う、あんたはどこにも存在しないのだよ。**なあに**、あんたは赤の王様の夢の一部に過ぎないのだから」。人間否定の恐ろしい文脈となっている。ここに見られる‘Well’は両者とも「なあに」あるいは「だって、ほら」という、相手を軽蔑している音調が感じとれる談話標識の役目を果たしている。話し手が後続発話をまともに解釈するよう仕向ける機能を果たしている。

‘Well’を含む文脈を1ヶ所だけ検討することにする：

‘**Well**, it’s no use *your* talking about waking him,’ said Tweedledum, ‘when you’re only one of the things in his dream. You know very well you’re not real.’

‘I *am* real!’ said Alice, and began to cry...

「**ふん**、王様を起こす云々なんてあんたが言ったところで、何の役にも立たないんだよ。だってあんたは王様の夢の中の一存在に過ぎないのだからな。あんたは実在の人間ではないということとはよく分かっているはずだ」「私、実在の人間だわ！」とアリス。

文脈から明らかに Tweedledum に徹底的に非人間扱いされている場面なので、「ふん」という訳語が適切と思われる。「それはそうと」という、話題転換の談話標識でもある。

初登場の‘I tell you’の含まれる文脈を検討する：

‘But it *isn’t* old!’ Tweedledum cried, in a greater fury than ever. ‘It’s *new*, I tell you -- I bought it yesterday -- my nice NEW RATTLE!’ and his voice rose to a perfect scream.

似た者同士の兄弟がたかがおもちゃのガラガラのこと喧嘩をする場面で、「でも古くなんか
ないんだぜ。言っておくけど、昨日買ったばかりの新品なんだよ」という下りである。ここに見
られる談話標識ははっきりと相手に念を押す定型句となっている。PODは‘I tell’を‘forms of
asseveration’と語釈している。LDOCEはこの句に関しては言及していない。いずれにしても強
い口調であることに異論はない。別の英語表現を使うと‘I warn you’あるいは‘you must
know’ということになる。そう、あの連続して生起する‘Now! Now!’とほぼ同じ働きをしてい
ると断言可能である。

7. 第5章：‘Wool and Water’に現れる談話標識は‘Oh’ 18回、‘you know’ 5回、‘Well’と‘Why’
がそれぞれ3回、‘Now’ 2回、‘Come’, ‘you see’, ‘dear me’, ‘I say’, ‘I declare’がそれぞれ1回
となる。この章はものごとが逆に起こる展開となり、現実の世界では考えられないような台詞が
続くことになる。

最多生起の談話標識‘Oh (/oh)’は必ずしも「驚き」を含意するとは言い難い：

Alice was just beginning to say ‘There’s a mistake somewhere --,’ when she had to leave
the sentence unfinished. ‘**Oh, oh, oh!**’ shouted the Queen, shaking her hand about as if she
wanted to shake it off. ‘My finger’s bleeding! **Oh, oh, oh, oh!**’

何かに指を刺される前に白の女王は「痛い、痛い、痛い！」を連発する場面で、PODによる
定義、‘expressing various emotions’の中の一つ、「痛みの感情」の吐露となっている。類似の
場面があと3段落続くが、引用省略とする。

痛みの感情吐露以外の‘Oh’が含まれている例を提示すると：

‘What sort of things do *you* remember best?’ Alice ventured to ask.

‘**Oh**, things that happened the week after next,’ the Queen replied in a careless tone. ‘For
instance, now,’ she went on, sticking a large piece of plaster on her finger as she spoke, ...

「どういふことなら最もよく覚えていらっしゃるの？」とアリスが敢えて尋ねると、「**そうだな、**
再来週に起こったことだな」と白の女王が無造作に答えることになる。ここに見られる‘Oh’は
一息入れて、話題を立て直す働きをしている談話標識となっている。

ここに見られる‘now’は「さてと / ところで」という話題変換の談話標識と言える。

小川を流れる小舟の上でアリスが灯心草を摘み取ろうとする場面がある：

‘I only hope the boat won’t tipple over!’ she said to herself. ‘**Oh, what** a lovely one! Only I
couldn’t quite reach it.’

「小舟がひっくり返らなければいいけど！**おお**、なんという綺麗な灯心草よ！でも、どうしても手が届かないの！」とアリスは独り言を言う。ここに見られる 'Oh' は明らかに「詠嘆」を含意していて、憧れの灯心草の花に心を打たれている状況を示している。日本語で言う「高嶺の花」がここでの灯心草となる。

'You know', 'Well', 'Why' などはこれまでの使い方と大同小異となっているので言及しないことにする。'Come' についても同様なことが言えるが1例のみ言及すると：

Alice carefully released the brush, and did her best to get the hair into order. '**Come**, you look rather better now!' said Alice, after altering most of the pins. 'But really you should have a lady's-maid!'

白の女王の髪からブラシを抜き取り、髪を綺麗にして「**さて**、女王様、これで随分綺麗になりましたよ！」とアリスは言う。ほっと一息ついた状況での発話なので話題転換の談話標識と言えよう。

前章に引き続き、'dear me' が再登場することになる：

'It can't go straight, **you know**, if you pin it all on one side,' Alice said, as she gently put it right for her; 'and, **dear me**, what a state your hair is in!'

「**あのう**、片方だけにピンを留めたのではまっすぐにはなりませんわよ。それに、**まあ**、なんて髪の毛がぼさぼさなのよ！」初めの 'you know' は聞き手に軽く同意を求めている談話標識と言えよう。あとの 'dear me' は「おやおや、まあまあ」という、少なからぬアリスの驚きを表している。PODに「驚き」を表す、とあるのでここが合致する。

ここで初登場に 'I say' と 'I declare' に言及することにする：

'In the water, of course!' said the Sheep, sticking some of the needles into her hair, as her hands were full. 'Feather, **I say**!'

'*Why* do you say "Feather" so often?' Alice asked at last, rather vexed. 'I'm not bird!'

少し文脈の説明が必要となる。場面は小川。当然、櫂を操る技術が求められるが、少女アリスにその専門語が分かるはずがない。この引用の直前に「カニはどこにおりますの？」というアリスの質問に対して、羊が答える場面である。羊は素直に「もちろん、水中にいるよ」と字義通りに答える。ここに見られる 'feather' は「羽毛」ではなくて、「(オールを) 水平に返す」という、ボート漕ぎに関する専門語である。こうして大人である羊と子どもであるアリスの会話が噛み合わない場面となっている。従って、'I say' は強い口調で、「**ほら**、羽根っ返して！」となる。アリスが 'feather' の意味を解していないので、羊は多少苛立っているのである。OEDは 'a mere asseveration' と簡単に定義しているが、PODは 'draw attention, open conversation, or express

surprise' と語釈している。ここではアリスの注意を引き、かつ驚き（アリスの無知ぶりに対する）を表していることになる。LDOCE は 2 つの意味があり、1)「驚き、興味・関心、怒り、悲しみ等の表現であるが、意味はやや弱い」というのと、2)「他者の注意を引く」の意もある、としている。LDOCE に呈示されている例文から察すると、上記の引用例中の 'I say' は他者の注意を喚起する談話標識、と結論できる。

談話標識としての 'I declare' はこの章の最後の辺りに生起する：

'The egg seems to get further away the more I walk towards it. Let me see, is this a chair? Why, it's got branches, **I declare!**' How very odd to find trees growing here! And actually here's a little brook! Well, this is the very queerest shop I ever saw!'

「卵は私が近づけば近づくほどますます遠ざかって行くみたい。ええと、これは椅子かな？おやおや、枝が生えているわ、**確かに！**こんな所に木々が生えているなんて、一体どういうことかしら！それにここには小川もあるじゃない！おやおや、こんなけったいなお店なんてこれまでに見たことないわ？」とアリスは考えることになる。

2 つの 'Why' と 'Well' はともにアリスの驚きを表していることは確かである。'I declare' を POD は 'colloquial expression of surprise' と語釈している。LDOCE は 'an expression of slight surprise or slight anger' と語釈し、その驚きが「軽い」ものであることを言っている。この文脈に合致するものと言える。

8. 第 6 章：'Humpty Dumpty' に現れる談話標識は 'you know' 6 回、'well' 4 回、'ah' と 'Now' が 3 回、'I mean' 2 回、そして 'in fact', 'Why', 'then', 'I declare', 'at least' がそれぞれ 1 回となる。この章で取り立てて特筆に値する文脈あるいは談話標識はなさそうであるが、若干検討していくことにする。

まずは 'in fact' で、久しぶりに遭遇する談話標識となる：

Alice didn't know what to say this: It wasn't at all like conversation, she thought, as he never said anything to *her*; **in fact**, his last remark was evidently addressed to a tree -- so she stood and softly repeated to herself: --

卵の形をした、ずんぐりむっくりの人間、Humpty Dumpty から小馬鹿にされる場面である。ここでは「**実際に、実のところ**」という順接の談話標識となっている。POD では特に是正を導入するために使われる、とある。LDOCE はずばり 'really, actually' とあり、これだけでは順接か逆接かは判別が難しい。しかし、後者の辞典では具体的用例が呈示してあり、逆接の用例から入り、順接の用例で終わっている。この引用例は逆接となっている。

'Why' が含まれる文脈を検討してみることにする：

‘Why do you sit out here all alone?’ said Alice, not wishing to begin an argument.

‘**Why**, because there’s nobody with me!’ cried Humpty Dumpty. ‘Did you think I didn’t know the answer to *that*? Ask another.’

「あなた、どうしてここにおひとりで座っていらっしゃるの?」「**なあに**、俺様と一緒に座っている人がいないからさ!」と Humpty Dumpty がこともなげに答える始末。

明らかにアリスは小馬鹿にされているので、ここの ‘Why’ は意外な発見 (アリスが当たり前のことを知らないという) に対する驚きを表す談話標識となっている。

‘Now’ と ‘I declare’ が共起する文脈を見て見ることにする :

‘To send all his horses and all his men,’ Alice interrupted, rather unwisely.

‘**Now I declare** that’s too bad!’ Humpty Dumpty cried, breaking into a sudden passion. ‘You’ve been listening at doors --- and behind trees --- and down chimneys --- or you couldn’t have known it!’

出だしの句は ‘Humpty Dumpty’ の歌の一部であるのでアリスはスラスラと覚えていたのであるが、Humpty Dumpty はそれを立ち聞きしていたのでは? と誤解する下りである。従って「**さてさて、言っておくが、いいか、それは実にいけないことだぞ!**」と突然、激昂している場面なので、ここに見られる ‘Now’ と ‘I declare’ はいずれも相手に忠告をしている談話標識で、‘I warn you’ または ‘You must know’ の意となる。

上にすぐ引き続いて ‘Ah’ と ‘well’ が共起する文脈を見てみることにする :

‘I haven’t, indeed!’ Alice said very gently. ‘It’s in a book.’

‘**Ah, well!** They may write such things in a *book*,’ Humpty Dumpty said in a calmer tone. ‘That’s you call a History of England, that is....’

Humpty Dumpty はてっきりアリスが立ち聞きしていたな、と勘繰っているのでアリスは「そうではありません、ほんとうよ! だって、ある本に出ていますよ」と事実を言う。そこで「**あ、そうか!**」と Humpty Dumpty が納得する談話標識となっている。相手の言を受容していることは ‘in a calmer tone’ を見ると分かる。

‘I mean’ が現れる 2 か所を見てみることにする :

‘At least,’ she corrected herself on second thoughts, ‘a beautiful cravat, I should have said --- no, a belt, **I mean** --- I beg your pardon!’ she added in dismay, for ...

「少なくとも」とアリスは考え直して前言を訂正することになる。「美しいネクタイ、と言うべきだったわ --- いいえ、ベルト、**という意味です** --- ご免なさい!」とアリスが戸惑っている場面である。ここは Humpty Dumpty が卵の形をしているので腰と首の区別が分からないので細長いものが果たしてネクタイなのかベルトなのか区別がつかなくなる。従って ‘at least’ は前言を

訂正、あるいは言い換える際の用いられる談話標識になっている。‘I mean’もほぼ同様の機能を果たし、「つまり、私が言いたいのは」となる。やはり結果的には言い換えの表現である。

いま一つの例を見てみることにする：

‘... they gave it me --- for an un-birthday present.’

‘I beg your pardon?’ Alice said with a puzzled air.

‘I’m not offended,’ said Humpty Dumpty.

‘**I mean**, what is an un-birthday present?’

「俺様にくださったのだよ --- 非誕生日の贈り物としてね」。

「済みません、何とおっしゃいました？」「別に俺は怒ってはいないよ」「**いえ、私が言いたいのは**、非誕生日の贈り物ってどういうものですか？ということなんですけど」。ここでは文頭で使われていて、「つまり、そのう」という、先行発話の意図を明確化したり、補足説明したり、より適切な表現を付け加えたりする状況となっている。‘I mean’そのものが「私が言いたいのは」という真意を表す表現なのである。

Humpty Dumptyは一応、言葉の解釈の天才ということになっている。そこで例の‘Jabberwocky’という詩の中の難解な語（いわゆる「鞆語」）をアリスの願いを聞いて解説する下りが延々と続くことになるが、その一節を見てみることにする：

‘Exactly so. **Well then**, “mimsy” is “flimsy and miserable” (there’s another portmanteau for you). And a “borogove” is a thin shabby-looking bird with its feathers sticking out all round -- something like a live mop.’

「まさしくその通り。**それでは次へ**行くぞ、“mimsy”とは…」というふう得意げに語釈を続けていくことになる。自信たっぷりのHumpty Dumptyなのでこの‘Well then’は次の行動に進む合図、あるいは新しい話題に転換する際に使われる談話標識になっている。と同時にここではHumpty Dumptyの自信のほどが窺える。

引き続き、アリスは新たな鞆語の説明をねだることになる：

‘And then “*mome raths*”?’ said Alice. ‘I’m afraid I’m giving you a great deal of trouble.’

‘**Well**, a “rath” is a sort of green pig: but “mome” I’m not certain about. I think it’s short for “from home” -- meaning that they’d lost their way, **you know**.’

「**そうだな**、“rath”とは一種のブタみたいなものだね。でも“mome”に関しては自信がないね。おそらく“from”と“home”から成る鞆語かも。つまり、**ほら**、迷子になってしまったってことさ」。ここに見られる‘Well’は受けた質問に対して、一息入れて「そうだね」という、発話の中で間を持たせることによってもったいをつけ、導入しようとしている内容をさらに興味深いものにする機能を果たしている。

9. 第7章：‘The Lion and the Unicorn’に見られる談話標識は ‘you know’ 4回、‘Why’ 3回、‘now’ 2回であとは ‘you see’, ‘I say’, ‘Well’, ‘Ah’ がそれぞれ1回生起する。これらすべてこれまでに生起しており、その働きに特に変わったものは見当たらない。そこで2ヶ所だけに絞って検討することにする。

‘What’s this!’ he said, blinking lazily at Alice, and speaking in a deep hollow tone that sounded like the tolling of a great bell.

‘Ah, what is it, now?’ the Unicorn cried eagerly. ‘You’ll never guess! I couldn’t.’

「なんだこりゃ!」とライオン。…。「ああ、さて、そいつは一体全体何だろうね? お前さんには絶対わかるまい。この俺様にも分らなかったんだから」と Unicorn が答える。ここに見られる ‘Ah’ は先行発話からの情報を受けて「ああ」と一旦答えて、しばし淀んでいるところがある。相手の発話を受けてどう答えようかと迷ったり、適当な言葉が見つからず言い淀んでいるときにしばしば使用される談話標識となっている。

最後に ‘I say’ が生起する文脈を検討することにする：

‘Now cut it up,’ said the Lion, as she returned to her place with the empty dish.

‘I say, this isn’t fair!’ cried the Unicorn, as Alice sat with the knife in her hand, very much puzzled how to begin.

「さて、ケーキを切り分けてくれ」と Lion。…。「言っておくけど、これはフェアプレーとは言えないぜ!」と Unicorn。ここに見られる ‘I say’ は相手の「注意を惹きつける」談話標識となっている (POD)。それも極めて強いものとなっている。別の英語表現を用いると ‘I warn you’ あるいは ‘you must know’ ということになる。文頭の ‘Now’ が斜字体になっているが、これは「さてと」と一息入れて、聞き手に注意を促している談話標識となっている。

10. 第8章：‘It’s My Own Invention’ に現れる談話標識は ‘you know’ 7回、‘you see’ と ‘Well’ が6回、‘In fact’ と ‘then’ が3回、‘Come’, ‘Oh’ が2回、‘after all’, ‘Now’ がそれぞれ1回生起し、それぞれの機能あるいは働きはこれまで見てきたものと変わりはない。頻出する ‘you know’ と ‘you see’ はともに相手に軽い同意を求めるもので、‘Well’ は話を始めるにあたり、唐突さをなくしてスムーズに話に入るための談話標識となっている。‘In fact’ は常に「順接」なのか「逆接」なのかを見極めなければならない。この章では3か所ともに「順接」の機能を果たしている。1つだけ例証することになると：

‘My mind goes on working all the same. **In fact**, The more head-downwards I am, the more I keep inventing new things.’

「わしの頭は常に働いておるぞ。実際に、頭が下に下がれば下がるほど、新しいものを発見で

きるのじゃ」。完全なる「順接」の例と言える。‘Come’は2例とも詩の中に現れる：

“Come, tell me how you live.”

聞き手に「さあ、どのような生活を送っておられるのか教えておくれ」という、相手に発言を促している談話標識で POD に見られる定義 ‘now then (in encouragement)’ に相当する。2回生起する ‘Oh’ はアリスの小さな「驚き」の発声となっている。3回生起する ‘then’ はいずれも「次に」を意味する時系列に行動を説明する談話標識となっている。1回生起する ‘after all’ は「結局のところ」という結論を表す、常套的な談話標識となっている。

11. 第9章：‘Queen Alice’に現れる談話標識は ‘you know’ が12回で突出していて、あとは ‘Well’ 3回 ‘Why’ が2回、そして ‘Now’, ‘Oh’, ‘Ah’, ‘at last’ がそれぞれ1回生起する。‘you know’ が生起するのは文中と文末が半々である。‘ah’ と ‘oh’ はある情報を受け止めた応答の合図であるが、前者はその情報が話し手の予測と合致して満足や喜びを感じ、かつ真面目なことを含意する。後者はその受け止めた情報が話し手の情報と合致していないので驚きを表すことが多く、ややくだけた感がある。キャロルはこの2つの使い分けを見事にこなしているように思われる。

この章で1ヶ所だけ引用するのは ‘at last’ となる：

At last the Red Queen began. ‘You’ve missed the soup and fish,’ she said. ‘Put on the joint!’ And the waiters set a leg of mutton before Alice, who looked at it rather anxiously, as she had never had to carve a joint before.

ついに赤の女王はこう言われました：「あなたはスープと魚料理を見過ごしてしまったね。今度は骨付き肉を置いておくれ！」。すると給仕たちはアリスの前に羊のもも肉を置くことになる。文字どおり「ついに、最終的に」の意で、PODに見られる定義、‘after much delay, in the end’ に合致する。‘after much delay’ という語感も大切にしたい。

12. 第10章：‘Shaking’はわずか7行から成り、談話標識は ‘whatever’ 1回のみ生起する：The Red Queen made no resistance **whatever**: only her face grew very small, and her eyes got large and green: ...

赤の女王は（おとなしくして）全然抵抗は**しません**でした…… そう、否定的内容の前文を強める働きをしている談話標識となっている。PODは ‘no’ あるいは ‘any’ のあとで ‘at all’ の意、とある。LDOCEは nonassertive な文章で使われるときは ‘at all’ の意、として Have you any interest whatever? [興味があるとでも言うのか?] という例文を呈示している。

13. 第11章：‘Waking’はただ、... And it really *was* a kitten, **after all**. という一文で終わっている。おそらく1つの章が1つの文章で終わっているのは英語文学作品の中では世界最短の長さかも知れない。前章の ‘Shaking’ と押韻しているところを見ると、キャロルの心憎いまでの言葉

の操作と言える。これまでアリスの相手をしてきてくれた赤の女王はあの黒い子猫キティだったことが判明する。ここに見られる ‘after all’ は [すべてを勘案して結果] (‘in spite of what has been said or done or expected’ (POD), つまり、「とどのつまり、結局は」という、話を終える機能を果たす談話標識である。

14. 第12章：‘Which Dreamed it?’ に現れる談話標識は ‘Now’ と ‘Oh’ が2回、‘By the way’, ‘You see’, ‘(but) then’ がそれぞれ1回生起する。‘Oh’ は2回ともアリスの小さな「驚き」を表している。‘Now’ は2回とも ‘Now, Kitty!’... ‘Now, Kitty’ と愛猫に呼びかける、注意を喚起する談話標識となっている。‘You see’ も ‘You see, Kitty’ という、やはり愛猫の注意を喚起する談話標識で同じ働きをしている。

この作品の最後の章では ‘by the way’ と ‘but then’ の含まれる文脈を検討する：

‘By the way, Kitty, if only you’d been really with me in my dream, there was one thing you *would* have enjoyed ---’

「ところで、キティ、あんたがほんとに私の夢の中で一緒に居てくれたら、あんた楽しんでくれたことが1つあったわね」。まさしく話題転換の「ところで」を意味する代表的な談話標識となっている。この点では ‘Now’ あるいは ‘Well’ と同義あるいは類義と言える。POD は ‘digression’ を形づくる定型表現、と定義している。LDOCE は「(会話において新しい話題を導入する働きを持ち) ‘in addition’ [付け加うるに]」と定義している。POD と LDOCE の英語による視点の置き方に相違があるのは興味深い。

He was part of my dream, of course --- **but then** I was part of his dream, too! Was it the Red Queen, Kitty? ...

もちろん、赤の王様は私の夢の一部であった --- **でも**、私だって赤の王様の夢の一部でもあったのよね! ‘but’ はひとまず考慮しないことにして、ここに見られる ‘then’ は「それならば、そうすると、ということは」という意で、先行話者の言を受けて推論的に答える談話標識となっている。そしてしばしば直前に ‘but’ が付加されて、一つの常套句的談話標識として頻出する。

注：

- 1) OALD による定義は次のようになっている：(文法用語で) ‘a word or phrase that organizes spoken language into different parts, for example ‘Well...’ or ‘On the other hand...’
- 2) 英語談話標識用法辞典、ix
- 3) これら6つの語(句)について POD は次のように説明している --- ‘dear me’: int. expressing surprise, distress, &c., ‘indeed’: expr. Incredulity, surprise, &c., ‘there’: int. drawing attention, ‘come’: (imperat, as interj.) now then (in encouragement), ‘so’: int. of approval ‘&c., ‘eh’: int. expr. inquiry, or surprise, or inviting assent. [north var. of AH, OH]
- 4) 英語談話表現辞典、三省堂、東京、内田聖二、2009

Textbooks, Reference Books and Dictionaries Consulted:

- Through the Looking-Glass*, Penguin Popular Classics, Penguin Books, 1994
- Alice's Adventures in Wonderland* and *Through the Looking-Glass*, The World Classics, by Roger Lancelyn, Green, edited with an Introduction, OUP, 1982
- The Annotated Alice*, with an Introduction and notes by Martin Gardner, Penguin Books, 1970
- More Annotated Alice*, by Martin Gardner, Random House, New York, 1990
- Language and Lewis Carroll*, by Robert D. Sutherland, Mouton, 1970
- 英語談話標識用法辞典、研究社、松尾文子・廣瀬浩三・西川真由美、2015
- 英語談話表現辞典、三省堂、東京、内田聖二、2009
- The Pocket Oxford Dictionary (POD, 5th edition), OUP, Oxford, 1969
- The Concise Oxford Dictionary (COD, 5th edition), OUP, Oxford, 1964
- The Oxford English Dictionary (OED, 2nd edition), OUP, Oxford, 1989
- Longman Dictionary of Contemporary English (LDOCE), Longman, Bath, 1978
- Oxford Advanced Learner's Dictionary (OALD, 8th edition), OUP, Oxford, 2010